

道元禅師の死

葉山美知子

京都医学史研究会

道元(1200~1253)は鎌倉時代前期の禅宗の僧侶、日本曹洞宗の開祖であり越前永平寺(1244年建立)1世である。道元は公家の出自で権門勢家の両親をもつが、14歳で天台宗比叡山にて得度出家、翌年禅宗建仁寺へ移り修行するが、禅学を究めるため23歳(1224)で中国宋に遊学、4年後帰国して建仁寺に戻り、後に深草へ移って32歳(1233)で興聖寺を開いた。その頃から『正法眼蔵』の執筆を始め、衆徒も増えるが比叡山から弾圧迫害を受ける。そして朝廷からも洛中追放の沙汰が下り、44歳(1243)道元は衆徒と共に都を逃れ、幕府御家人六波羅探題評定衆の波多野義重の懇望で越前志比庄、義重の所領に移り翌年1244年大仏寺を造営、2年後1246年に「永平寺」と改称。以降、『正法眼蔵』執筆と説法を精力的にこなす日々であったが、1252年53歳の道元に健康の異変が起こる。以下、永平14世建擲(1415~1474頃)の撰録記述『永平開山道元禅師行状記(建擲記)』(1472頃成立)の明州本(天文7年本写)を中心に論を進める。

道元の体調異変の初出は建長4年(1252)53歳「今夏ノ比ヨリ微疾マシマス」である。越前の寒暑霜雪が肌を侵し、山川の毒氣(瘴毒)が体内に結ばれたとして病悩が始まる。この年の暮から建長5年の正月にかけて『眼蔵』巻12「八大人覚」を永平寺で書き終えたが、それ以降「御病漸々重増」して「師遂不起」になり『眼蔵』は「御草案等事即止也」に至った(永平31世大了愚門謹校)。その建長5年7月に道元は永平2世に懷葬を指名、そして8月5日檀越波多野義重の「名醫ニ逢セ申シ御養性ノ為也」という勧めで上洛を決意、懷葬を随侍して都に向かった。8月半ば、都の西洞院高辻通の俗弟子覚念邸に到着。その時、道元は頌歌を残すが「十箇月来臥病床、討薬……如来授手見醫王」と誦し、如来の導きで良い医者に診てもらえるという希望を持ちまだ生きる意欲は失っていなかった。すぐさま後深草上皇が道元のもとに官医を遣して診察させたが、病み衰えた道元には百薬の効能はなかった。入浴してわずか10日余り8月28日午前4時、辞世の偈○自分道元は54年の生涯を不生不死不老不病で生きてきた、今やこの世に求めるところは何ひとつない、もんどりを打って生きたまま黄泉へ陥ちるッ……と書いて筆を投げ捨て入寂した。

以上の記述からでは道元の死因は不明だが、道元没後6年目、正嘉2年(1258)2月23日義重「右手ニ腫物ヲ出シテ死去シ給。開山モ腫物ニテ御涅繫アリ」と記され、道元が義重と同じく「腫物ノ死去」と判明する。さらに道元の入寂を見届けた随侍の懷葬は「開山御腫物ノ血ヲ帷ニヒタシ取テ其衣ニテ袈裟ヲ縫テ二代和尚平生掛サセ給フ」ていた。この記述にある道元の腫物から出る血と膿の量はそれらを浸した布地で袈裟を縫えたほどだった、袈裟は幅34cm丈10mの要尺として布地面積は3.4m²である。3.4m²の血膿は大袈裟ではあるが、多量であったことは確かで道元は死に至っている。腫物とは○はれもの、できものであるが、道元のそれは単純な皮膚病ではなく悪性の危険なできもの○癰腫である。病名の可能性としては ①丁瘡(現・細菌性膿皮症) ②悪腋腫(現・悪性リンパ肉芽腫) ③瘰癧(現・結核性リンパ腺炎) ④丹毒瘡(現・丹毒) ⑤浸淫瘡(現・膿疱疹) ⑥灼創(現・化膿菌性皮膚炎) ⑦附骨疽(現・急性骨髄炎) ⑧癰疽(現・同)などがある。いずれとも断定できないが、道元が波多野義重の死因「右手ニ腫物」と「同じ」であったという記述に注目したい。化膿菌の侵入ではどれも該当しそうだが、手足に腫物ができる症状は⑧癰疽の可能性もある。

道元禅師の死因は800年前の劣悪な衛生環境や道元の超克己的質素な生活環境がもたらした悪性の化膿菌性皮膚炎と考えられるのではないだろうか。